
存在するものしないもの

篠原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

存在するものしないもの

【Nコード】

N9217D

【作者名】

篠原

【あらすじ】

ある日葉子が聞いたなんでもないようなオカルト話。それが現実になる・・・

前編（前書き）

前編ははコメディ的な感じで後半はホラーで行こうと思っています。

前編

「皆、頑張ってるー？」

そんな陽気な声をかけながら入ってきたのは、クラスリーダーの皆野^{みな}葉子^なだった。

しかし中のメンバーはその声とは裏腹にとてもイラついた様子で葉子を睨む。

ここ、桜葉^{さくらば}高校は今学園祭準備の真っ最中。

残りあと一週間とあり、お化け屋敷という大掛かり作業が必要なものを決めた割りに取り掛かりが遅かったこの2・7はまだ準備が完璧に終わっておらず、他のクラスがラストパートに掛かったのにかかわらず未だ中盤でもたついていた。

そんななか、息抜きのためにとクラスリーダーである葉子は担任から徴収したお金で近くのコンビニへ行き、飴など作業しながらでも食べられるお菓子を買いにいったのだが、どうやらそれが反感をかつたらしく

「おまえ、クラスリーダーなんだからちったあ準備手伝えよー!!」

「だからホラ、飴ちゃん買って来たじゃない」

「飴買う暇があれば、こっちの色塗り手伝えー!!」

「駄目よ。私(5段階評価で)美術1だから」

そうなんでもないように腰に手をあてさざりと言った葉子だが、

「いばれることか!!」

言われた男子は手に持っていた筆を折りそうな勢いで葉子に食って掛かる。が

「でもさ、杉野だつてアタシと同じぐらいじゃん」

「な、なんでそれを!!」

「この間廊下に飾ってあった皆の校舎風景見て。だつてアレはどう見てもこの世の風景には見えない。いうなら地獄?アレみてアタのだけタイトルは『パラルル世界』かと思った」

「アレは夕方の風景だツ!!」

「え!?嘘!!業火に苦しむ人々の図かと思つたのに!」

「それは下校中の生徒だツ!!」

あえなく撃沈され、しぶしぶ自分の作業一（色の配色、パレットを洗ったり水をかえる）に戻った杉野を見た葉子の親友、清水知里しみずがこれ以上ココの士気を下げて殺意を上げないようにと葉子をもともとやっていた仕事場（大道具作り）につれていく。

「はいはい、いい加減こつちの仕事手伝ってねー。アンタ、美術は1のクセに技術は5なんだから」

「なんだろう。アタシ生前は大工かなんかだったのかな?」

「設計には向いてないけどね」

そうしてまた再び作業が開始される。

最初は手中してダンボールを切ったり等して壁や通路、棺桶作りに励んでいた葉子・・・だが

「あー暇！」

「暇！じゃないでしょうが！まだ半分も仕上がってないのに！」

「いやーだって、永遠とダンボールとにらめっこしながら生きていくのかと思うといやになっちゃって・・・」

「にらめっこする暇があるんならさっさと手を動かせばいいじゃない。そしたらどんどん形が変わってっておもしろいでしょ？」

「知里・・・形が変わってもダンボールは所詮ダンボールじゃない。ダンボールはそれ以下でもそれ以上でもないんだから・・・」

「アンタ・・・馬鹿のクセにそういうときだけ正論ぶつけてくるのね・・・」

そういつて知里は大きなため息をつく、葉子に紐と小さな鍵を何個か渡す。

「じゃ、この鍵に、この組みつあみして通す作業てつだって」

「え？何この鍵？心の鍵ってやつですか？」

「葉子、アンタの口にも鍵かけてあげようか？」

そこは普通チャックでは・・・と思つたが、知里の目はいつにもまして本気^{マジ}だったので素直に謝ることにした。

「ごめん。で、結局なにこの鍵」

「葉子・・・クラスリーダーが文化祭実行委員会の話聞いてなくてどうするのよ・・・」

「ごめん。ちよつと睡魔さんが楽しそうなお誘いくれて・・・」

「それにつられて夢の世界に旅立つたのね・・・」

「ほら、誘惑には勝てないって奴？で、結局この鍵ってなに？」

「アンタね・・・まあ、いいか。最初ッから説明するからその使えるかどうかかわかんない頭フル回転させてよく聞いてね？」

「ありがとう！さっすが知里！頼りになる」

「なんで貴方がこのクラスのリーダーなのか理解に苦しむわ」

そういつて呆れ顔の知里の肩をぽんぽんと二度たたくと何故か頭を三度バシバシたたかれた。そして、鬱憤晴らしがおわったのか知里は作業を続けながらも説明する

「いい？今回のお化け屋敷は普通のとちよつと変わった感じにしようつてことで、使わないクラスを借りて、一つ目のクラスで鍵番をしているお化けの目を盗んで最初受付で渡された鍵を取った鍵の変わりに鍵箱の中に入れてるの。もし鍵番をしているお化けに見つかったら失敗。次のクラスの奥にある5つの箱の中からそのとき持っている鍵で開けれる箱を制限内に探さなきゃいけないの」

「ふんふん。でもそれつて5個ぐらいなら全部あければ済む話じゃない」

「だから制限かけてるの。5つのうちあけていいのは2つ。もし鍵箱から取った鍵なら箱番お化けがヒントをくれる手はずになっているの。それで、めでたく5個中2個入ってる宝、まあ目印のメダルだけど。を手に入れたら成功。ハズレのビー玉を手に入れたら失敗。教室から出たところで何を手に入れたかみて、それに応じた賞品をプレゼント。どう？思い出した？」

「あーなるほど！なんとなく思い出した」

「そう。それはいいんだけど。コレ、ほとんど貴方が考えた案ですけど？」

そう知里に言われ、葉子はしばらく考え込むが最終的に思い出せなかったのかアハ　つとおどけた風に笑いごまかしをはかるが、隣で一緒に作業していた知里の目が全然笑ってないことに気がつき、大人しく作業に戻る。

そしてそれから数分後

「ねー」

「葉子、貴方の頭には黙って作業するという言葉はないのかしら？」

「あるっていえばあるけどさっき使い尽くしちゃった」

知里は本日二度目のため息をつき、諦め気味に葉子に尋ねる

「で、何？」

「何か面白い話題ってない？」

くだらないだろうと思っではいたがこんなにもくだらない内容とは思っておらず、そんな事を思う暇があるならもう少しスピードアップしろッ！と言いたいところだが、どうせ言っても聞かないことは去年一年生の時の付き合いで既に承知済みだったので、しょうがなく面白そうな話題をさがすことにした。

「存在するものしないもの。この話ってしたっけ？」

「でた。オカルトマニア話」

「うるさいわね。あんただってゲームマニアじゃない」

「アタシはゲームが好きでマニアじゃないわ」

「同じことよ。で？聞くの？聞かないの？」

「聞く」

案外素直な答えに最初からケチをつけなければいいと思うのだが、これまた去年の記憶から無駄だと分かっているので話を続ける。

「この世には存在するものとしらないものがあるの」

「何それ？影と本体みたいなの？」

「いいトコついてるわね。ドッペルゲンガーって知ってる？」

「知ってる。この間やったばっかだから」

「それ、ゲームの話でしょうが。まあ、いつか。説明の手間が省けたし」

「で？そのドッペルゲンガーがどうしたの？」

「最初にいったとおり。この世にはね？存在するものとしらないものがあるの・・・それは月の無い夜に牙を向く・・・」

しばらくして、ようやくその日の作業が終わり、終りそうにないの
で持って帰れるものがあれば数名は家にて残業が確定した。
そんな中、クラスの大半に

「みんなが持って変えるならアタシも何個か持って帰ろうか？」

「・・・お前は持ってかえるとみんなの仕事を増やすからやめてくれ！！！！」

と猛反対をくらい本日一番なにもやっていなかった葉子だが、荷物は朝と相変わらず軽いまま帰っていく。頭は朝よりすこし重くなつた気がするが・・・

結局あの後途中から二人とも話に熱中してしまい、手が止まっていたおかげで作業も進まず知里は何個かの鍵を持って帰って作業をするハメに。葉子は持って帰らせるわけにもいかなないので天罰として鉄建制裁をくらったのだった。

「くっそー杉野の奴ー思いっきり殴ったわね・・・」

葉子は頭をさすりながら夕方の帰り道をいつもどおり歩いて帰っていく。

「今日・・・確か新月だったかな・・・？」

今日は、月の無い夜・・・

中編

「たっだいまー」

葉子はそう言いながらドアを開けると、

「間違えました」

と言って何故かドアをパタンと閉める。

そして、もう一度表札を確認し、自分の記憶をたどってちゃんと自分の家だということを確認すると、自分の家のはずなのにいやな汗を垂らしながらドアノブを握り、ソツと開ける。

するとそこには・・・

「おつかえりー葉子VVさっきなんで閉めちゃったの？パパ、見知らぬ人にこんな恥ずかしいことしちゃったのかと思っちゃったじゃないか」

「いえ、父上、それ十分身内からみても変質者ですから。むしろ身内だからこそかなり恥ずかしいのですが」

そこに居たのは、両手を広げて何故か鬼のパンツを穿いた葉子の父、皆野駿すくろだった。

「てか、とうさん。なんで鬼のパンツなんか穿いてんの・・・？今9月だよな？鬼全然関係ないよね」

「これ？これは今度父さんのところで発売する商品だよ サンプル貰ってきたやつだ」

駿はそうにこつと笑う（気持ち悪い）。

実は葉子の父は有名な衣類を作っているところで、駿はなんと商品開発部の部長で、頼りがいのある上司なのだが、家に帰るとただの

「葉子の分もあるよ？着て見る？」

「あつはつは。冗談はいい加減にしろつて。年考える。ついでによるなメタボ予備軍」

ただの親ばかりだったりする。

しかも、抱きつこうとすると鞆を投げられ見事顔面直撃。結構子ども自身には嫌われてたりする。

そんな態度に駿はちよっぴり涙目になりながら、リビングまで走っていく。

「うわああああん！！葉月はづきッ！！葉子が反抗期に突入してるよー！冷たいよー！」

「あらあら」

そして、思いきりドアをあけ、中で夕食の準備をしていた妻の葉月に抱きつく。

それもいつものことなのか、葉月は持っていた包丁をゆっくりと置いて、頭を数度なでる。

そんなことをしていると、あきれ顔をした葉子が続いて入ってくる。

「お母さん、甘やかしすぎなんだつて。どこが良かったのさ。駿つて名前負けしてんじゃん」

「お父さんはね。とっても優しくったのよ？そんなこと言っちゃだめじゃない」

「葉月ー！！」

「はあ、まったく面影もないね。ほら、どきなよとうさん！お母さんがご飯の準備できないじゃない！！」

「いやああー!!はなれなーい!!」

「ほらほら、お父さん。後で遊んであげますから」

「ほんとか!? よっしゃー!!」

「(いい年こいたオッサンが、あのはしゃぎっぷり・・・)」

あんなオッサンが実の父親なんて泣けてくる。

そう、自分の両親の行動にあきれながら、葉子は自分の部屋へいき、とりあえず着替えることにする。

「はーあ、今日も疲れたなー・・・」

そう言つてベットにかばんを放り投げ、履いていたスカートをハンガーにつるすと、自分自身もベットへと沈む。

実際は今日一番働いていないのが葉子なのだが、当の本人は頑張ったがんばったと自画自賛しながらそのまま誘われるがままに眠りにつこうとしていた・・・が、

ヴヴヴヴ・・・ヴヴヴヴ・・・

「あ?」

同じくベットに放り投げていた携帯が単調な振動を繰り返し、メールが届いたことを知らせる。

葉子はめんどくさそうにしながらも、それを拾い上げ内容を確認する。

葉子へ

さっそくなんだけど、本題にはいる!!

今日、鍵に紐通す仕事してたで
しょ？あの紐なんだけどさ、な
んか足りなさそうだから、アン
タの家の近くにある百均でよさ
そうなの買ってきて！！

急いでるから、明日までによろ
しく！！

b y 知里

「ひも・・・ねえ」

そう呟くと、葉子は部屋にかけている時計を見る。と、それは7時
12分を表示していた。

確か・・・

「百均つて閉まるの7時50分・・・だったよな・・・」

自転車を飛ばせば、葉子の家から近くにある百均までは約15分
今からでなければ間に合わず、明日の朝買おうにも百均が開くのは
朝8時。どう考えたって遅刻する。

しばらく時計を眺めたまま固まっていた葉子だったが、すぐさま我
に返ると

「なんでこんな時間にメールすんのよ！！！！知里のバカー！！！！
！！！」

ほっぱり投げたスカートをつかみ取りすぐさま履くと、次にかばんの中から財布を取り出しその辺にほっぱり投げているハンドバックに突っ込む。

そして、急いでリビングへ行つて親に”買出し行つてくる！！”と口早に告げると、玄関に置いてある自転車の鍵をひつつかみ、大慌てで出て行った。

夜は、これから始まるというのに・・・

中編（後書き）

久しぶりの投稿で、こんなのでごめんなさい。

しかも、当初考えていたより続きます。

次で最後にするつもりですので、もしよければお付き合いしてください。さると、うれしいです。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9217d/>

存在するものしないもの

2010年10月10日13時08分発行